ひきこもり状態の子どもをもつ親の人生の意味づけの変容

－高齢の親のライフストーリーから－

ルーテル学院大学大学院　　氏名　酒井　真理子（010209）

キーワード3つ：ひきこもり、意味づけの変容プロセス、ライフストーリー

１．研 究 目 的

近年わが国においては、人口構造や核家族化など世帯構造の変化の中で、8050問題やひきこもりの長期化・高齢化が社会的な課題となっている．現状では、親が年金生活になっても子どもの世話をし、生活が困窮していき親自身が介護の必要になった段階で、地域包括支援センターに繋がり顕在化した事例は少なくない．さらに、このような状況に至る前の段階として、高齢の親が支援者としての役割を担っていることは少なからずみられる．ひきこもり状態の子どもを持ち高齢化する親の中には、困難を抱えた子どもを支援する責務があると捉え、自身の困難に気づかない、あるいは気づいていても言えない状況があるのではないかと考える．だからこそ、一人の親の目を通して、困難な状況を含めた様々な経験について、高齢化した親の語りから分析する研究は意義あるものと考えられるが、こうした研究はあまり多いとはいえない．そこで、本研究では、親のライフコース上で生じる細かな変化のプロセスを高齢化する親の目線で語られるストーリーから分析することを目指した．目的としては、子どもがひきこもり状態になることで生じる様々な経験が親の人生にどのような意味をもたらしたのか、その変容過程と、これからの人生をどのように意味づけているのかについて明らかにすることである．

２．研究の視点および方法

1）調査の概要

地域のひきこもり家族会に所属する、ひきこもり状態の子どもをもつ65歳以上の親、2名を対象とする．なお、子どもがひきこもり状態になる前後から現在に至るまでの経験や心情とその変化を丁寧に分析していくために、できる限り多く語れる可能性のある方を選定し、半構造化面接により調査を行った.実施期間は、2020年11月16日から2021年9月28日であり、2名共に1回目が1時間半弱、2回目が15分から20分であった．

2）分析方法

本研究では、研究者との対話の中から対象者の人生の経験の意味をあらわすことを目的としているため、ライフストーリー法を用いて分析を行った．具体的には、逐語録をもとに過去と現在、今後を区分し、意味のあるストーリーごとに分節化してタイトルを付け解釈を行った．次に、そのストーリーをもとにリサーチクエスチョンのテーマ①過去から現在に至る経験の意味づけと変容はどのようなものか②親としての経験を通したこれからの人生の意味づけは何か、に沿って変容プロセスを分析した．

３．倫理的配慮

2020年2月、ルーテル学院大学研究倫理委員会の承認（申請番号19-30）を得た．調査対象者2名に、研究の主旨・方法・倫理的配慮等を口頭で説明し書面による同意を得ている．また、プライバシーに特段の留意が必要であるため、調査対象者およびその家族の名前はイニシャルではなく仮名を使用している．なお、日本社会福祉学会の「研究倫理規程」に基づき配慮しており、本発表に関連して、開示すべきCOIはない．

４．研 究 結 果

リサーチクエスチョンのテーマに沿って分析した結果、重要な転機、転機に影響を及ぼしたものが抽出され、対象者2名の意味づけの変容が明らかになった．重要な転機は3つに分類され、第1に、親は子どもがひきこもり状態になるというもっとも重要な転機を経験し、「何もやってこなかった」、「自分を責めた」、「相談する人もいない」、「恥ずかしい」、「夫が責める」などと語り、様々な葛藤を人生に意味づけていた．第2に、気の合う仲間との出会いという転機を迎え、「なんでも喋れて吐き出して」、心が癒されることにより解放された．そのことをきっかけに支援者の言葉が理解でき、「子どもを変えるのではなく親が変わらなきゃ」と気づく．自己を理解し自身の変化を認識した親は、子どもの価値観を認め親の考え方を押し付けずあるがままの子どもを受容することで子どもの理解が可能になっていった．病気や詐欺被害など親の衰えが子どもの思いに影響を与えることで、子どもも親に対する認識に変化がみられた。第3に、過去から現在に至る経験の意味づけを転機としての将来の意味づけを分析した結果「お役に立ちたい」と語り、同じ悩みを持つ親の一助となる活動をすること等新たな価値観を獲得し社会的役割を将来に見出していた．こうした親の変容には、周囲の人々、家族会の仲間や支援者、8050 問題等の世相や制度、夫や当事者である子どもの他のきょうだい等の様々な他者や出来事が影響を与えていた．

５．考 察

親の人生に意味づけられた葛藤は、理解の変化という過程を経て、社会的役割のみならず幸福感を将来に見出し困難な中で成長するという意味づけの変容が考察された．なお、親の葛藤や変化、成長を助けるものとして、社会的支援の重要性も示唆された．また、新たな視点として、一つ目は、葛藤を生んだ夫婦間のコミュニケーションの問題が、老いの辛さを抱えることで、夫は妻を責めることをやめて理解し協力者となり妻の自己の解放に貢献しており、夫婦の老いは子どもの変化にも影響を及ぼしている．つまり、高齢の親にとっての老いは、身体的・心理的・肉体的に辛いものであることは間違いないが、ポジティブな方向に作用することもあるといえる．二つ目は、2名のうち1名のインタビュー調査の後半部分で、意図したことではないが、相互作用から対象者により自身の経験を語り継いでいきたいという語りを得ることができた．これは、ひきこもり状態の子どもをもつ親をエンパワーメントするという支援においてナラティブ・アプローチを用いたライフストーリーを聞くことの効果が示されたのではないかと思われる．このように、高齢の親の経験の意味づけは、語りの中で繰り返されたり、生成されることが示唆された．